

「アフリカ系アメリカ人ことば」の系譜

アフリカ論／民族言語論

源邦彦

一 はじめに

一九九六年一月一日、アフロセントリックな社会思想、教育思想、言語思想を基盤とした言語政策、「エボニクス決議」がカリフォルニア州オークランド統一学区教育委員会によって可決された。この政策は当時の多文化主義論争の影響もあるだろうがアメリカ全土を巻き込む論争に発展した。主な原因は、AAL (African American Language: アフリカ系アメリカ人⁽¹⁾ことば⁽²⁾) がアフリカ西部地域に由来するアフリカ系の「言語」であり英語の「方言」ではないとする比較言語学的手

法に基づく言語系統論にあった。この理論は「アフリカ論／民族言語論」として知られている。

AALなどの集团的属性にアフリカの「民族的真正」を見出そうとする発想は、八〇年代に入り勢いを増すアフロセントリズムに共通する。アフロセントリズムとは、ヨーロッパ文化を普遍的なものとして捉える同化主義思想に対抗して生まれた、私的領域に限らず公的領域においても文化の複数性を目指す多文化主義思想のことである。七〇年代、フランスを中心とした「ポスト・モダニズム」の思想がアメリカの言語学などの分野を中心に急速に影響力を拡げていった中で発展したものである

(油井 五頁)。アフロセントリックな言語思想が合衆国の言語学界でにわかに勢いを増したのもこの七〇年代であり、多文化主義思想の潮流に歩調を合わせるようにアフロセントリズムも進展したのであった。アフリカ論はまさにこれら二つの思想の協調関係の座標軸上に位置している。

言語は、「体系」という枠を超えた、言語的差異や言語的境界線が想像・造成された「社会的構築物」でもある。この想像・造成の過程には当然のことながら言語学者も意識的あるいは無意識的に関与している (DeRose 8)。個人や集団の心的態度 (敵対心や宗教的信仰など) を表象する象徴性によってその実体が想像・造成され、さらにはその象徴性がその実体を最終的に規定することもある。つまり、自律言語学や狭義の社会言語学はこのような象徴的想像・造成過程を捨象しあるいはその傾向が強く、言語現象を総体的に論じることが難しい立場にあると言える。

本稿はまさにこの点を補うべく、アフリカ論の発展史を言語構造というよりはむしろ社会学的な側面に焦点を当てた社会言語学的アプローチによって考察を試みるものである。ある言語学者がブラック・ナシヨナリズムとして AAL の自決のために比較言語学によって目指してきたものを、言語学者がナシヨナリズムにおいて演じるイデオロギー的・政治的役割という観点

から分析したい。

二 ナシヨナリズムと言語学

——「過去—現在—未来の継続性」の希求

ナシヨナリズムは一九世紀初頭のヨーロッパにおいて比較言語学の誕生に大きく関わっている (Gauger 117)。ヨーロッパ諸語の起源に民族的起源を求め、それと同時に「言語的継続性」に民族の「過去 (起源) — 現在 — 未来」という継続性 (Fishman 44-45)、ならびに「言語的固有性」を見出すことで、「拡張的民族統一」そして「民族的真正」を想像・造成しようとしたのである。以上の民族言語学的プロセスについてフィッシュマン (Fishman) はナシヨナリズムと言語の関係性から次のように述べる、

ナシヨナリズム運動がバナキュラーを利用・擁護し、集団特有の「拡張的統一」と「真正化」を達成しようとする行為は非常にありふれた現象である。この二つの特性の共通点として主張される「継続性」は、遺産を探し求め、その所有権を主張し、そして利用するための真正化装置である (……) ナシヨナリストの指導者と民衆にとって、バナキュラーは最も

疑いようのない「固有性」の指標であるばかりか、そのように看做されているからこそ疑いようのないナシヨナリティーの差異化あるいは継続化装置の役割を頻繁に果たしてきたのである (45, 53, 強調は著者)

このようなナシヨナリズムの要求に應えるべく生まれた言語学は、言語の発祥についての知識を探究すると同時に、厳正な事実に基づく「客観的」な学問へと置き換えられねばならなかった (Gauger 118)。言語学は、当時生まれた「科学」としての歴史学、つまりは人類という概念を歴史化するという総体的行為の一部を成していたのである (Gauger 119)。

ナシヨナリズムは言語学の誕生を促したばかりではない。すでに確立した言語学的知識を、ナシヨナリズムの要求する拡張的統一と民族的真正を達成する手段として、無意識的あるいは意識的に動員することもあり得るのである。本稿が論考するアフリカ論はまさにこのようなプロセスを経て比較言語学に行き着いている。AALの由来に関する議論において比較言語学と対立が先鋭化するのがクレオール言語学であるが、互いの理論はどのような関係にあり、それらとナシヨナリズムはどのような関係性にあったのであろうか。

比較言語学は一九世紀初頭のドイツで誕生した。国民統合の

ための政治的定式として「一民族―一言語」という政治思想が確立し、この図式は生物学的遺伝と一致するものと考えられたのである (Maroldt 156)。アウグスト・シュライヒャーはここに進化論的論理を導入し、言語を人間の意志とは無関係の自律的な存在として位置づけたのである (Holm 2; Maroldt 156)。いいかえれば、言語接触の「社会史」というよりは言語に始まり言語で終わる「言語史」なるものを可能にしたのである。

比較言語学は、セム人 (ユダヤ人) との差異化を図るために、ヨーロッパ諸語の「純粹な系譜」つまり「言語的起源」と「言語的継続性」とを「科学的」に解明することで、アーリア人 (ヨーロッパ人) の純粹なる「民族的起源」と「民族的継続性」をも可能にしたのである。そして、その「自然発生的」な民族語の研究が「人工的」な言語計画 (たとえば、表記法の確立や文法、辞書の記述、翻訳など) と親密に関わることで、そのような「言語的継続性」とは一見矛盾する「言語的断絶性」すなわち「言語的固有性」をも達成し、ヨーロッパ諸語は「バナキユラー」の地位から「言語」へと「昇格」されたのである。

ドイツ生まれの比較言語学者マックス・ミュラーは、言語の属性を意味する「語族」を「民族」すなわち「アーリア民族」へと拡大したが、そこには人種主義が存在するという指摘もある (長田 一三〇―一三二頁)。比較言語学の実手法は、現実の

言語データに基づいた経験主義を基調とする科学的手法に則っている。しかしながら、一九世紀から二〇世紀初頭にかけては、「言語接触」という考え方は主として表面的な語彙レベルのものとして言語学の隅に追いやられていたのである (Maroldt 156-157)。

一方、比較言語学のように語彙的類似性に関係なく文法的観点から起点言語との言語系統的継続性を追及する手法とは異なり、言語の発展が一旦は語彙起点言語・文法起点言語の双方から「断絶」され再構された各起点言語の方言と捉えることが限りなく不可能な新しい言語体系、言い換えれば、「言語的断絶性」を見出そうとするのがクレオール言語学と言えるかもしれない。個々の言語が混じり合うことなく独自の発展を遂げることを前提とする比較言語学を旨指したシュライヒャーに対し、言語接触によって言語が発展してゆくことを唱えクレオール言語学の先鞭をつけたのは皮肉なことにも彼の弟子であるフーゴ・シュールハルトであった。しかしながら、当初は、クレオール語は植民地で「墮落したヨーロッパ諸語」として描かれ、非ヨーロッパ人種に対する排外的で純粹主義的なナショナリズムが存在したことは否めないであろう。すなわち、互いに対立する言語理論ではあるが、特に発祥においては人種主義という点で一致するのである。

ナショナリズムや人種主義が言語学の発展に一つの大きな役割を演じてきたことは間違いないであろう。現在、研究対象に対し価値判断を下すことがないとされる言語学が、本来は社会政治的判断である言語境界設定に一役を担ってきたという事実がある。すなわち、「語」、「クレオール語」、「方言」、「変種」という前提に基づきその体系性を記述・議論するという行為そのものが、社会政治的言説を生産・再生産することであるからである (DeRose 68-69; Duncan 374; 糟谷 五五四頁; Smitherman 1972, 85)。

三 アフリカ系アメリカ人ことば——系譜諸説

言語境界設定に何らかのかたちで関与してしまっているという点においては、AALを研究する社会言語学者についても同じことが言える。AALと「標準英語」の違いについては、採用する言語理論によって、共時的にも通時的にも言語的境界を共有する場合、共時的には言語的境界は共有するが通時的には方言ではない言語的差異を確認できる場合、共時的にも通時的にもそのような言語的差異が確認できる場合とが存在する。では具体的にAALの系譜についてどのような立場が存在するのであるのか。

AAIの系譜については、一九五〇年代にそれが英国内で用いられていた方言を基盤に形成されたとする「英語論」が出現する。一九六〇年代に入ると、脱クレオール化した英語であるという史観、すなわち「クレオール論」が取って代わり、その後、再び初期の英語論が変異を伴った新たな方言論が誕生する(Wolfram 39-40)。一方、アフリカ論の発祥は言語学的には一九七〇年代初期という見方ができるだろう。このアフリカ論はブラック・ナショナリズムの時代にアフリカ性を求めるところから生まれたという点では、クレオール論と一致する。

現在AAIは、基本的にはAAE(アフリカ系アメリカ人英語)、AAVE(アフリカ系アメリカ人バナキュラー英語)、BE(黒人英語)等、英語の一変種としてその歴史的発展が論じられている。そのような前提に立ち議論されている分類法として以下三つの仮説群を挙げる、

- (1) 英語論 (Anglicist View)、クレオール論 (Creolist View) (Wolfram)
- (2) 基層論 (Substratist View)、クレオール論 (Creolist View)、英語論／方言論 (Anglicist / Dialectologist View)、建国者原理論 (Founder Principle View)、移住者原理論 (Settler Principle View) (Green)

- (3) アフリカ論 (Africanist View)、英語論 (Anglicist View)、クレオール論 (Creolist View) (Rickford & Rickford)

(2)の分類法は(1)を細分化したものと考えることができる。ともにAAIを英語の「方言」として議論を展開する。(3)に関してはここに挙げた分類法の中では唯一、AAIをアフリカ系の「言語」と看做すアフリカ論を含めて議論が進められている。一方、AAIが英語以外の言語であるという立場を明確に主張したうえで議論を展開するのはアーニー・A・スミス (Ernie Adolph Smith) の分類法である、

- (4) 変形文法論／方言論 (Transformationalist/Dialectologist Theory)、ピジン・クレオール論 (Pidgin-Creolist Hypothesis)、イスラーム黒人民族主義論 (Islamic Black Nationalist View)⁽²³⁾、アフリカ論／民族言語論 (Africanist/Ethnolinguist Theory) (Smith, 1997a, 1997b, 2001)

この分類法の詳細については第六章に譲るが、ここで語られる「アフリカ論／民族言語論」こそが、一九九六年のカリフォルニア州オークランド市においてアフロセントリックな言語政策として現出した系譜論である。次章では、アフリカ論がどのよ

うな社会的、思想的背景から生じるに至ったのかをブラック・ナシヨナリズムの発展史の中に位置づけたい。

四 アフロセントリズムの顕在化

——「拡張的民族統一・民族の真正」の希求

一九八〇年代後半に入ると、アメリカ国内のアフリカ出身奴隸子孫を指し示す「アフリカ系アメリカ人」という名称が広く世間に知れ渡ることになる。その同じ時期に、教育分野等で「アフロセントリズム」という、世界観や民族性をアフリカに求める思想が台頭してきていた。それは「ブラック・ナシヨナリズム」という概念によって語られてきた集団意識現象を、新たに顕在化してきた特徴を加味して捉えるものである。

まずこのブラック・ナシヨナリズムと言語との関係性について若干の説明をしておく。ブラック・ナシヨナリズムは「古典的ブラック・ナシヨナリズム」(二〇世紀初頭)と「ブラック・パワー」(六〇〜七〇年代)に分かたれるが、これらの時代には、アフロセントリズムの論理に依拠したスミスのアフリカ論とは異なる言語思想が存在していた。古典的ブラック・ナシヨナリズムの場合、ユーロセントリズムを受容しそれを文明の頂点と看做していたことから、たとえばリベリアに理想の地

を求めたアフリカ・ナシヨナリズムの父、牧師アレクサンダー・クランメルは、奴隸となったアフリカ人が神のご加護により英語を与えられ、英語がアフリカのどの言語よりも優れていると信じていた (Appiah 3)。そしてブラック・パワーの時代になると、より自立的な言語思想が著しくなり、英語の黒人変種を集団的象徴と看做す考えが独創的芸術家、教育者、学者など知識層のあいだで語られるようになる。そして、それらの人々は自身の言葉遣いをアフリカ化しようとしたのである。

(Smitherman 145)

それではアフロセントリズムに話を戻すと、オースティン (Austin) によればブラック・ナシヨナリズムとの関係性からみたアフロセントリズムとは、

統合主義的で (……) (最も) 文化的なブラック・ナシヨナリズムである (……) 黒人ミドルクラスの活動家が白人エリート 文化資本と競合しようとするための一手段である (……) (古典的ブラック・ナシヨナリズム、アフロセントリズム) とともにヨーロッパ「文明」を到達基準としているという点ではユーロセントリックと言える (170, 187, 192, カッコ内は著者)。

ではアフロセントリズム自体はどのようなものであろうか。「アフロセントリシティ」という準拠枠を最初に提案したモレフィ・K・アサンテによれば、それは「継続性を断たれた歴史、そして不確かな未来しか基本的には残されていない」(Asante 1998: 11) という意識から出発している。そのようなアフロセントリズムとは、

現象をアフリカ人の観点から捉えるための準拠枠のことである(Asante 1991, 171)。ここでは、古代エジプト文明とナイル河谷文化が標準とされる(Asante 1998, 11)。教育においては、教員が学生に世界、集団、概念、歴史をアフリカの世界観なるものから学習する機会を提供することを意味している(……)ユーロセントリズムは白人中心主義に基づき、その目的は教育、政治、経済等の分野で白人の特権と優位性を保守することにある。アフロセントリズムはユーロセントリズムとは異なり、他集団の視点を貶めてまで民族中心主義的な安定政策を容認するものではない(Asante 1991, 172)

アサンテもスミスもこのアフロセントリズムを共有しているが、古代エジプトへの歴史的継続性を求める二人の思想はシェイク・A・ジョップに帰する。ジョップ(Diop 211-219, カッ

コ内は著者)は離散したアフリカ出身奴隷子孫の「文化的アイデンティティ」の構成要素として以下の三点を挙げている、

- (1) 歴史的要因(民族的継続性)……他集団との差異化を可能にする歴史的継続性の共有
- (2) 言語的要因(言語的継続性)……比較言語学的手法により再構される言語的一体性を可能にする祖語(すなわちエジプトに始まった人類史最古の、黒人が使用したアフリカ系文字言語)
- (3) 心理的要因(民族的心性)……黒人の集団的性格

ジョップ(Diop 219)は、言語的要因に関しては、離散したアフリカ系奴隷子孫の言語がすでにアフリカの言語と断絶されているとする。しかしながら、スミスはその比較言語学的手法によって文化的アイデンティティを再構築してみせるのである。同じ思想的由来を持つアサンテとスミスであるが、言語ナシヨナリズムにおいて「言語的継続性≡民族的継続性」を求める思想は、必ずしもAALの「言語的固有性」に帰着するわけではない。たとえばアサンテは、アフリカ系アメリカ人のことばそしてコミュニケーションストラテジーについて編集した自身の編著書(Smith²⁾ 1972)でAALを英語の一変種として扱

っているからである。ただし、その後の著書（たとえば、Asante 1998, 46-48）では、AALの固有言語論を論じる中で、それへの賛否は明言しないものの、そこで用いられるメタ文法的分析法を強く支持し、以前のように黒人英語（Black English）という名称は使っていない。また同様の言語観を持つアフリカ系アメリカ人識者としては、アフロセントリックな教育カリキュラムを推奨する立場から、教育言語には標準英語に加え黒人英語も使われるべきであることを示唆している教育学者フェリックス・ポテングが挙げられる（Boteng 82）。

もちろん、このような言語アフロセントリズムはごく最近の現象というわけではない。一九八〇年代に入ってから教育分野におけるアフロセントリズムは、一九三〇年代の社会学者カーター・G・ウッドソンの思想によるところが大きい。ウッドソンは教育場面における合衆国アフリカ出身奴隷子孫の差別的な扱いを考察する中で、一九三三年に自身の言語論・言語教育論を以下のように展開している、

学校での言語学習で、生徒は、黒人ことば（Black dialect）を、崩れたアフリカ語（African tongue）としてこの言語の背景を学ぼう（……）指導されるよりは、軽蔑すべき黒人特有の所有物としてあざ笑うよう導かれたのである。そのよ

うなアフリカ語（African language）には、商人、宣教師、官吏が現地人を搾取する目的を除いては、全く注意が払われなかったのである（Woodson 18）。

これは、AALをアフリカ系の言語として描く初期の言語アフロセントリズムの一つであるが、同年、AALを英語の一変種として看做す言語論が別の社会学者W・E・B・デュボイスによって示される。そこでは、黒人系大学においてはアフリセンティックな教育の一環として、教育言語として標準英語に加え黒人英語を使用することが推奨されている（DuBois 123）。しかしながら、アフリカ系アメリカ人の文化に対する科学的探究は、その人々が所有する文化的特徴にアフリカの要素が残存することを唱えたメルビル・J・ハースコビッツ（Herskovits 1941）が現れる一九四〇年代を待たねばならなかった。

五 アフリカ系アメリカ人ことばの固有言語論 ——言語学との結合

言語学という科学的な手法によってAALの体系性の発見に貢献した代表的な研究者としては、クレオール言語学者ロレンツォ・D・ターナー（Turner 1949）が挙げられる。この研究

は、AALの一つとして捉えられているガラことば (Gullah dialect) にアフリカの要素の存続を言語学的に論証した原典として頻繁に引用される。ここではAALを英語系クレオールと看做し「言語的固有性」の追及をも可能にしている。さらにAALのアフリカ系の言語としての可能性を指摘した研究として、クレオール言語学を専門としながらもそのような新言語体系を比較言語学の視点から再検討を促したマービン・C・アレインの議論を紹介したい。アレインによれば、このような「民族性」の学術的探究には以下のような背景があるという、

クレオール諸言語の扱われ方は、その大部分がアフリカとの「言語的継続性」が断たれていることを示唆している (……) クレオール諸言語が形態統語的に多くの点で西アフリカ系の諸言語に由来することが証明されるならば、当然のごとく西アフリカ系諸言語からアフロ・アメリカンの諸言語 (dialects) への形態統語的継続性が存在すると結論付けることが可能となる (Alleyn 125-126, 強調は著者)

このアレインによる言語系統論こそがスミスの言語論の形成に決定的な影響を与えたのである (Smith 2011, personal communication)。

アレインの論文が出された二年後の一九七三年には、社会学者ロバート・D・ツイッグス (Twiggs 1973) がAALを含めたアフリカ系のディアスポラの用いる様々な新言語を指す「西半球汎アフリカ語 (PALWH: Pan African Language in the Western Hemisphere)」という名称を開発している。アフリカ論との方法論上の違いは、その言語的固有性をアフリカの祖語に遡る言語的継続性ではなく共時的な体系性に求めようとしているところにある。

そして、六〇年代中頃から始まったAALの教育的論議が盛んになる七〇年代前半の一九七三年一月二六日、ある黒人学者集団による小さな会議が非公式にもたれ、AALに今日まで広く知られることになる言語名「エボニクス (Ebonics: Ebony + Phonics)」そしてジョップの文化的アイデンティティを實現し得るアフロセントリックな定義が宛がわれることになる。その名称は、心理学者ロバート・L・ウィリアムズが最初に案出したもので全会一致で採用されたものである。「黒人英語 (Black English)」や「非標準英語 (non-standard English)」という用語は欠陥語としての位置づけを示唆し、廃止されねばならないという批判がそれらの学者のあいだで相次いだためである (Williams & Rivers 100)。

エボニクスにこの時に与えられた言語学的定義も全会一致で

採用されたものであるが、比較言語学の視座から英語とは言語系統の異なるアフリカ系の新言語体系として最初に定義を提示したのは、当時書記を務めていたスミスである (Smith 2011, personal communication)。この時に与えられた定義によると、エボニクスは、

西アフリカ、カリブ、アメリカのアフリカ出身奴隷子孫が所有する同心円の連続体からなるコミュニケーション能力としての言語的・準言語的特徴から成る。そこには、とくに植民地的状況に適応するよう強制されてきた黒人が用いるさまざまなイディオム、バトワ、隠語、個人語、社会方言が含まれてゐる (Williams VI)

この定義はアメリカ以外の地域も含め、英語、フランス語、スペイン語などヨーロッパ系の様々な言語との接触から生まれた様々な新言語体系に適用される「言語集合体」を意味している。ただし、アメリカ国内でこの名称が用いられる場合は、たいていはAALのみを指している。しかしながら、スミスにとってこの拡張的定義は今も変わりはない (Smith 2011, personal communication)。言語ナショナリズムの特徴の一つでもある「拡張的民族統一」(ここでは「汎アフリカニズム」)を求める

思想の表れであろう。

いずれにしても、この小さな集まりにおいて「黒人英語」が「エボニクス」に置き換えられ、そして「方言」から「言語」へと「昇格」されるに至ったのである。つまり、以前からスミスが思い描いていたアフロセントリックな固有言語観が、比較言語学という「科学的手法」によってエボニクスとして「実体化」された瞬間である。

六 アフリカ論——「言語的継続性・固有性」から「拡張的民族統一・民族的真正」へ

ではスミスはそのアフリカ論によって何を求めているのか詳しく見てみることにしよう。ナショナリズムにおいてしばしば言語に「言語的継続性」、「言語的固有性」が求められること、そしてそれらを媒介として「拡張的民族統一」と「民族的真正」の生成が試みられる点についてはすでに述べた。

スミスは方言学や生成文法論に基づく英語論、クレオール言語学に基づくクレオール論という主流派の立場は採用せず、比較言語学に基づく独自のアフリカ論を堅持する。他の仮説とは一線を画するアフリカ論の特徴である「言語的継続性」についてスミス (Smith 1997b) の論点をまとめると以下のようにな

る。すなわち、

合衆国アフリカ出身奴隷の第一言語が英語と接触し英語使用者とのあいだに相互理解が成り立つようになったことが、AALが英語すなわちゲルマン語族に属するという根拠にはならない。再語彙化がもたらした混成方言すなわちAALは、基層に有する支配的な言語体系（文法構造）という観点からすれば西ニジェール＝コンゴアフリカ語族に属することになる。このようなAALすなわちエボニクスは(1)西ニジェール

＝コンゴアフリカ系諸言語が再語彙化された形態統語構造的継続体なのである。それは合衆国アフリカ系奴隷子孫が(2)西ニジェール＝コンゴアフリカ思考プロセスを維持していることを意味し、その思考プロセスはエボニクスの基層にある音韻構造、形態統語構造、意味語彙構造に表出する。これら下部構造の集合体つまり言語的体系性の支柱となっているのは、(3)集団共通の血統と文化的統一である。

この考え方にしたがえば、AALは文法的観点から起点言語である西アフリカ諸語との(1)「言語的継続性」民族の継続性／民族的歴史性」を維持し「言語的固有性」を有することになる。いったん「言語的継続性」が確立されると、(2)「アフリカの思

考プロセス」民族の心性」の存続を可能たらしめる。そしてこのプロセスに見出される(3)「拡張的民族統一」がこの言語的体系性を支えることで言語的継続性をも同時に支えるという一つの循環作用が生じる。ここにジョップの提唱する三要素「民族的歴史性」、「言語的継続性」、「民族の心性」が有機的に連鎖することで「文化的アイデンティティ」が、すなわちフィッシュマンの言う「民族の真正」が成立することになるのである。

ナシヨナリズムの差別化要因である「言語的継続性」と「言語的固有性」は、英語論とクレオール論では機能しない。英語論によれば、AALにはアフリカの要素が若干残っていることが指摘されているが、文法構造も語彙も基本的には英語の由来となり、ここでいう「言語的継続性」は西ゲルマン語群との継続性を意味することになってしまう。

一方、クレオール言語学は「言語的断絶性」を記述するのが一つの特徴である。したがってクレオール論もアフリカの要素の存在を認めてはいるものの、次の二点において「言語的継続性」民族の継続性」が断たれてしまう。まず、AALは通時的には起点言語である英語やアフリカ系の第一言語とはいったん切り離された新言語体系であったことになる。そして、共時的には脱クレオール化した英語の一変種であるという立場を取るため新言語体系としての「言語的固有性」さえも喪失してしま

うのである。つまり、AALの言語的特徴は英語との関係においては「従属的固有性」に等しく、アフリカの過去の栄光に遡る「自律的固有性／真正なる固有性」ではなくなってしまうのだ。

そして、比較言語学とクレオール言語学・方言学とは根本的な方法論上の違いがある。それはすでに触れたように比較言語学は他の二つの手法とは異なり社会的要因は念頭におかないことを原則としているのである。つまり、言語的関係性が確保できれば目標は達成され、社会歴史的な背景要因の真偽によってその妥当性を問うことが基本的にはなされないことになる。

以上、「過去（発祥）——現在——未来」の継続性を求めるナシヨナリズムの要求に対しては、スミスの言語論は有効に機能することがわかる。アフリカ論は、西アフリカから北東アフリカ（つまり古代エジプト）へと遡る偉大なる過去との継続性を、そしてその継続性ゆえの未来への存続の可能性をも引き出し、その継続性の中に現在のAALを存在たらしめるのである。

七 おわりに

比較言語学に則るアフリカ論は直接的に批判対象とされるか、あるいは最初から議論の枠外に置かれている場合がほとんどで

あることは事実だ。しかしながら、本稿の目的はアフリカ論の妥当性を既成の言語学的見地から問うことではない。少なくとも社会学的側面に焦点を当てた社会言語学的見地からすれば、アフリカ論は決して「サイエンス・フィクション」ではなく、それ独自の「科学的」意義を有すると考える。

しかしながら、スミスの論点はいくつかの自己矛盾を孕むことを指摘しておかねばならない。まず、アフリカ論はアフリカ系新言語としての独立を目標とする一方で、主流社会すなわちヨーロッパの社会に参画するために白人至上主義言語（英語）の獲得を目指す（ヨーロッパ文明を達成基準とする）という意味ではヨーロッパ的な価値観も容認することになる。この点は、九〇年代の多文化主義思想と通底する。そして、クレオール論や英語論を白人至上主義的であるとすると、彼が依拠する比較言語学もヨーロッパ的な発祥と方法論をもつ以上、互いに同じ土俵にしていることになってしまう。では、この自己矛盾をどのように理解すればよいのであろうか。

その発祥において、比較言語学はあるナシヨナリティーにわたっての自決問題と極めて深い関係を持ち、現在でもそのような関係性から言語系統が論じられることがあるように、スミスのアフリカ論は米国アフリカ出身奴隷子孫にとっての民族自決の問題としても論じられねばならない。彼自身も「ナシヨナリテ

イー／ネーションに言語の存在は自明の理であり、エボニクスはブラック・ナショナリズムそのものである」(Smith 2011, personal communication)と明言している。

彼のアフロセントリックな言語思想においては、ナショナリズムの求める二つの必須条件、つまり「近代」と「伝統」という集団的要請をそれぞれ「標準英語」と「黒人英語」という「同言語二方言」で満たすのではなく、「民族的真正」を前面に出すためにも前者については「英語」そして後者については

「エボニクス」という「二言語」主義を採用し、分離と共存が「想像」されていると理解する必要があるだろう。すなわち、スミスのアフリカ論は、合衆国アフリカ出身奴隷子孫が社会経済的自立のために白人至上主義言語を受容する引き換えに戦略的に採用された、かつてヨーロッパを中心とする学者たちが排外的で純粋主義を包含する自律言語系統論に倣った「対抗科学」と捉えられないであろうか。

註

- (1) アフリカ系といっても、本稿では、奴隷制時代にアメリカに連れてこられ、その子孫として在住し続けている人々を意味している。ただし、混血という点を考慮に入れると、厳密にどこからどこまでがアフリカ系なのかを判断することは主観的な問題でもある。
- (2) 本稿では、この名称のみ“language”を「方言」、「言語」のい

- ずれにも解釈可能な「ことば」という意味で用いる。
- (3) アフリカ論と対立しないことから本稿では議論の対象とはしない。
- (4) Molefi K. Asante は、一九七六年、奴隷制度を象徴するという理由で Arthur L. Smith から現在の名前に改名している。

- Alleyne, Mervyn C. 1971. "Linguistic Continuity of Africa in the Caribbean." Ed. Henry J. Richard. *Topics in Afro-American Studies*. New York: Black Academy Press, pp. 119-134.
- Appiah, Kwame A. 1992. *In My Father's House: Africa in the Philosophy of Culture*. New York: Oxford University Press.
- Asante, Molefi K. 1991. "The Afrocentric Idea in Education." *Journal of Negro Education* 60 (2): 170-180.
- . 1998. *The Afrocentric Idea*. Revised and Expanded Edition. Philadelphia: Temple University Press.
- Austin, Algermon. 2006. *Race, Black Nationalism, and Afrocentrism in the Twentieth Century*. New York: New York University Press.
- Boateng, Felix. 1990. "Combating Deculturalization of the African American Child in the Public School System: A Multicultural Approach." Ed. Kofi Lomotey. *Going to School: The African-American Experience*. Albany: State University of New York Press, pp. 73-84.
- DeBoise, Charles E. 2005. *The Sociology of African American Language: A Language Planning Perspective*. New York: Palgrave Macmillan.
- Diop, Cheikh A. 1991. *Civilization or Barbarism: An Authentic Anthropology*. New York: Lawrence Hill Books.
- Dubois, W. E. B. 1933. "The Field and Function of the Negro College." Ed. Herbert Aptheker (2001). *The Education of Black People: Ten Critiques, 1906-1960*. New Edition. New York: Monthly Review Press, pp. 111-134.
- Duncan, Garrett Albert. 2007. "Cultural Imperialism, Black Culture and Language Research in the United States." Ed. Shixu. *Discourse as Cultural Struggle*. Hong Kong: Hong Kong University Press. Kindle Edition. 3550-4905.
- Fishman, Joshua A. 1972. *Language and Nationalism: Two Integrative Essays*. Rowley: Newberry House Publishers.
- Gager, Hans-Martin. 2010. "Nationalism as a Factor in the Birth of Linguistics and in Linguistic Criticism." Eds. Claudia Lange, Ursula Acheter, and Göran Wolf. *Linguistics, Ideology and the Discourse of Linguistic Nationalism*. Dranturt am Main: Peter Lang, pp. 117-132.
- Green, Lisa J. 2004. "African American English." Eds. Edward Finegan and John R. Rickford. *Language in the USA: Themes for the Twenty-first Century*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 76-91.
- Holm, John. 2000. *An Introduction to Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 糟谷啓介 一九九三年『言語学に「言語」は必要か 言語の学問をどうしたいか』張本人はいつまでびす：ンシタール「ビチネーヤ大学就任講演」一橋論叢 一〇九(四)：五三九五五六頁。』
- Maroldt, Karl. 2010. "Ideological Bends in the Creolization Debate." Eds. Claudia Lange, Ursula Acheter, and Göran Wolf. *Linguistics, Ideology and the Discourse of Linguistic Nationalism*. Dranturt am Main: Peter Lang, pp. 155-174.

長田俊樹 二〇〇二年『黒ペイン字』 角川書店

Rickford, John R. and Russell J. Rickford. 2000. *Spoken Soul: The Story of Black English*. New York: Wiley.

Smith, Ernie A. 1974. The Evolution and Continuing Presence of the African Oral Tradition in Black America. Doctoral Dissertation, University of California, Irvine.

——. 1997a. *The Historical Development of Ebonics: The Islamic Black Nationalist View*. Los Angeles: Watts College Press.

——. 1997b. *The Historical Development of African American Language: The Africanist-Ethnolinguist Theory*. Los Angeles: Watts College Press.

——. 2001. "Ebonics and Bilingual Education of the African American Child" Ed. Clinton Crawford. *Ebonics and Language Education*. New York: Sankofa World Publishers, pp. 123-163.

Smitherman, Geneva. 1972. "Black Power Is Black Language." Eds. Gloria M. Simmons and Helene D. Hutchinson. *Black Culture:*

Reading and Writing Black. New York: Holt, Rinehart and Winston, pp. 85-91.

Williams, Robert L. 1975. "Introduction." Ed. Robert L. Williams. *Ebonics: The True Language of Black Folks*. St. Louis: Robert Williams and Associates, pp. VI-XII.

Williams, Robert L. and L. Wendell Rivers. 1975. "The Effects of Language on the Test Performance." Ed. Robert L. Williams. *Ebonics: The True Language of Black Folks* pp. 96-109.

Wolfram, Walt. 2000. "Issues in Reconstructing Earlier African-American English." *World Englishes* 19 (1): 39-58.

Woodson, Carter. G. 1990. *The Mis-Education of the Negro*. Trenton: African World Press (Washington, DC.: Associated Publishers, 1933).

油井大三郎 一九九九年 「いま、なぜ多文化主義論争なのか」『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』
油井大三郎・遠藤泰生編、東京大学出版会、一―二〇頁。

(みなもと へにこ／博士後期課程)